

黒部市生地地区の清水にみる 地域資源と住民の関係の持続性

松野 祐太¹・福島 秀哉²・中井 祐³

¹ 学生会員 東京大学大学院 工学系研究科社会基盤学専攻(〒113-8656 東京都文京区本郷七丁目 3-1)
E-mail:matsuno@trip.t.u-tokyo.ac.jp

² 正会員 東京大学大学院助教 工学系研究科社会基盤学専攻(〒113-8656 東京都文京区本郷七丁目 3-1)
E-mail:fukushima@civil.t.u-tokyo.ac.jp

³ 正会員 東京大学大学院教授 工学系研究科社会基盤学専攻(〒113-8656 東京都文京区本郷七丁目 3-1)
E-mail:yu@civil.t.u-tokyo.ac.jp

地域資源としての水を再評価した名水百選や水の郷百選では水質のみならず地域資源と住民の関係が重視された。しかし、昭和 60 年の名水百選選定から 30 年以上が経過し、少子高齢化の進展や生活の変化などによって名水百選に選定された名水においても生活利用が減少するなど地域資源と住民の関係が変化しているケースがある。

本研究では、名水百選に選定された清水と呼ばれる自噴井が町中に多く存在する黒部市生地(いくじ)地区を対象に、清水の空間、維持管理等の現状と変化を整理した。その結果、対象とした 8 清水において清水と住民の関係の持続性は空間整備や観光地化などよりも地域の活動等に影響されることが示唆された。

Key Words: *Ikuzi, syozu, local resources, residents, public washing place*

1. 研究の概要

(1) 背景

文部科学省は地域資源についての厳密な定義はないとしつつも、その特徴として非移転性(空間的に移転が困難)、有機的連鎖性(地域内の諸地域資源と相互に有機的に連鎖)、非市場性(非移転性という性格から、どこでも供給できるものではなく、非市場的な性格を有するもの)の 3 点を指摘している¹⁾。将来の地域再生のための重要な要素として地域資源に関する言及が多くみられるなど、地域資源の把握と活用は重要な課題である。

湧水や用水といった水資源は土地に固有のものであることから非移転性と非市場性を満たし、水を用いた農作物等の栽培、酒などの名産品の製造、生活での利用などから有機的連鎖性も満たす場合が多く、地域資源の一つであるといえる。

生活に必要な水環境に対する関心が昭和の末頃から高まり、環境省の「名水百選」、国土交通省の「水の郷百選」などを通して、地域の水場などが地域資源として再評価された。その選定条件としては、「地域住民等による保全活動があること」(名水百選)など、水資源と地域住民の良好な関係があることが明示されている²⁾。

その後多くの地方自治体が、地域資源として評価された水資源を活かし、様々な観光施策やまちづくり活動の展開を試みており、そのような地域における、将来の地域再生に向けた議論においても、引き続き水資源の活用は重要な課題であるといえる。

しかし、昭和 60 年の名水百選選定から 30 年以上が経過し、かつて、水資源と住民の良好な関係が存在し、名水百選に認定されるなど一定の評価がされた地域においても、生活様式の変化による利用の減少、少子高齢化などによる維持管理継続の困難など、地域住民と水資源との関係は変質してきている可能性が高い。これらの関係の変化について、過去の観光施策の影響も踏まえて実態として把握し、その要因を解明することは、地域再生の議論における地域資源の活用の方策について、過去の施策の影響を含めて議論するための重要な課題である。

黒部川扇状地は、黒部川流域の降水量の多さから湧水が多数みられる。富山県黒部市生地(いくじ)地区(以下: 生地)は、黒部川扇状地の扇端に位置し、黒部川の豊富な伏流水に恵まれる地域で、沿岸にありながら水質の良い地下水が自噴する。現在、生地では地下 80m 程から被圧地下水が自噴している場合が多く、自噴した地下水および自噴井を「清水(しょうず)」とよぶ³⁾。生地には、

個人で井戸を掘り、湧水を生活利用している家庭も多く存在する一方で、清水を活かした共同洗い場が存在し、そこでは近隣住民が、食べ物を冷やしたり、洗濯や食器洗いをおこなったりと共同利用を行っていた。各共同洗い場は利用する住民により維持管理されていた。これらの共同洗い場を含む生地の清水は、周辺住民による清掃活動・市による水質調査等が評価されて昭和 60 年に名水百選に選定され⁴⁾、共同洗い場が地域文化として定着していること・地元の住民がボランティアとなり名水をめぐる「まちあるき」が実施されていることなどが評価されて平成 8 年に水の郷百選に選定された⁵⁾。

名水百選の選定後、地域内のいくつかの共同洗い場は、黒部市の観光施策に向けた活用の対象となり、平成 9、10 年に行政による 7 か所の共同洗い場の空間整備が行われた⁶⁾。また、生地の清水を案内する黒部観光ボランティアの会が立ち上げられ、観光客や地区外からの清水の水くみ利用者がみられるようになった⁷⁾。

一方、生地地区の人口は昭和 33 年の 6417 人をピークに減少しており、平成 29 年 3 月末時点で人口は 3913 人で、老年人口が 37.8% と高齢化が顕著である⁸⁾。このような状況の中で名水百選や水の郷百選選定の評価対象にもなった住民と清水の関係も大きく変化していることが予想される。

地域資源は地域住民の生活文化の継続と深く関わるとともに、水資源の評価において不可欠であった地域住民と水との関係が変質している現在、各地域の固有性や多様性を活かした持続可能なまちづくりを行っていく上で、名水百選等選定後の住民と水との関係の変化の実態と、社会背景や観光施策による影響を明らかにすることが重要である。

(2) 目的

本研究の目的は、地域と水の良好な関係を有する地域資源として名水百選等に選定され、その後行政による観光施策がおこなれた生地の清水、特に共同洗い場を対象とし、地域住民と水資源との関係の変化とその要因を明らかにし、持続可能な地域住民と地域資源の関係の持続・構築に向けた知見を得ることを目的とする。

(3) 既往研究と本研究の位置付け

水資源や水利用施設と住民の関係については、吉住ら(2003)⁹⁾による島原の浜ん川湧水を対象に湧水で展開される住民の行動やルールとの共有について扱った研究や、吉田ら(2010)¹⁰⁾による横に掘られた井戸、もしくは隧道を指し、農業用水取水を目的とした暗渠水路である「マンボ」に着目し、利用形態や地域の人と水の係わりを考察した研究や、猪俣(2017)¹¹⁾による郡上八幡を対象とし、住民による自治的対応や空間整備に伴う管理形態の変化

に着目し、水利用施設との身体的な関りを一定量維持することができる活動を行うことが住民による管理の要点であるとした研究などがある。これらの研究は地域資源と住民の関係の変化と現状を調査している。

生地の清水を対象とした研究として、助重ら(2004)¹²⁾は地区外からの清水利用の実態について調査し、まち歩き観光の可能性と課題について検討している。これは、観光地化以降に増加した地区外からの利用者を対象としており、地域住民と清水の関係については言及していない。また、川久保ら(1999)¹³⁾は絹の清水および殿様清水について地域住民の維持管理や利用の実態を調査し、利用の減少を指摘しているがその後 20 年経過し、少子高齢化の進展などによって清水と住民の関係はさらに変化していると考えられる。また、川久保らは観光地化の影響を捉えようとしておらず、2 つの共同洗い場のみ扱っている点で本研究と異なる。

本研究は地域資源と住民の関係の持続・構築について知見を得ることを目的とすること、行政等による空間整備、観光地化、少子高齢化や生活の変化を地域資源と住民の関係に影響を与える要素として捉え、分析することに特徴がある。

(4) 対象地と生地の清水について

a) 対象地の概要

富山県黒部市生地地区は黒部川扇状地の扇端に位置する海沿いの町で漁師町として発展した。

生地地区には南から神明町、上町、四十物町、大町、宮川町、阿弥陀堂、芦崎の 7 つの町内会と、それを取りまとめる生地自治振興会が存在する。

b) 生地の清水と共同洗い場について

生地の共同洗い場は、洗濯や食器洗いなどの生活利用の場として地域の住民に利用されていた。通常複数の段に分かれており、一般的に上部は飲み水など、下部は洗濯などの用途に利用されるが、細かいルールは清水ごとに異なる。洗濯や洗い物などの生活利用(以下：生活利用)は清水を汚すことになるため、清水ごとに生活利用をおこなうことができる住民は決まっており、その住民によって清水の維持管理がなされていた。飲み水利用のための水汲みなど清水を汚さない利用は、すべての清水で可能であり、現在も地区外からの水汲み利用者が多くみられる。共同利用の清水には「清水庵の清水」などの固有の名称がつけられている。

c) 名水百選選定とまちづくりへの活用

地域住民と水との関係が評価され、生地の清水は名水百選に選定された。名水百選選定後、共同洗い場となっている清水と、一部の個人利用の清水を合わせた 21 の清水が町歩きマップに記載された。また、名水百選選定の基準に「水質・水量、周辺環境(景観)、親水性の観点

からみて、保全状況が良好なこと。」という条件があり、周辺環境整備が必須となっていたものの当時は床面にタイルが張られていない・東屋がないなど空間整備が十分でなかったことから、名水百選の基準に適合するように(ヒアリング M)平成 2 年、9 年(環境保全施設整備事業)、10 年(県まちづくり総合支援事業)に行政による空間整備が行われた⁹⁾。現在は、年間 5000 人ほどの観光客がガイドを利用する¹⁰⁾など観光客が増加しているほか、生地地区外からの水汲み利用者もみられる。

d) 本研究の対象とする清水

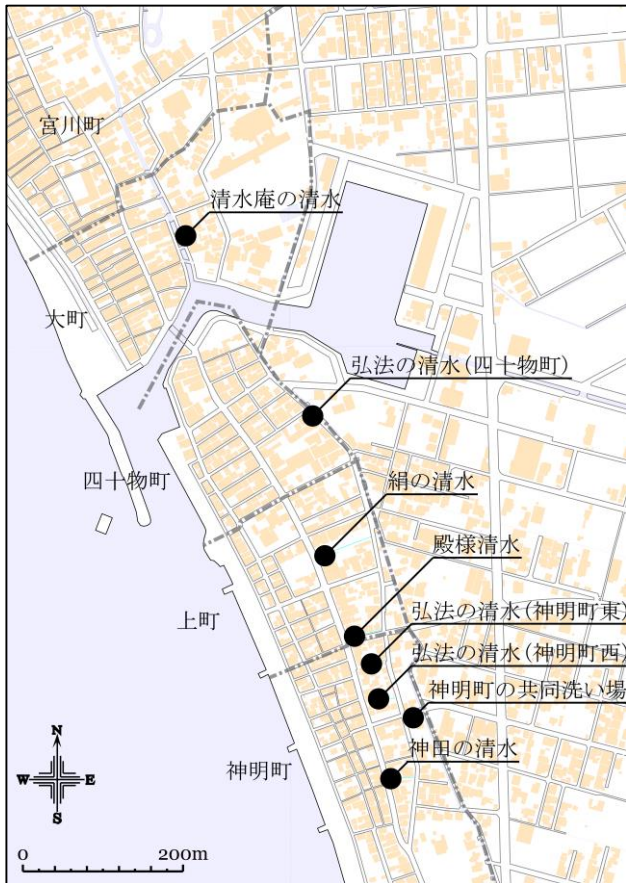


図-1 対象清水の位置

本研究では地域資源と住民の関係に着目することから、生地の清水のうち名水百選や水の郷百選で住民と水との関係が評価された共同洗い場を対象とし、その中でも行政などによる空間整備が行われており、町歩きマップにも記載され観光の対象となっている清水庵の清水、弘法の清水(四十物町)、絹の清水、殿様清水、弘法の清水(神明町東)、弘法の清水(神明町西)、神明町の共同洗い場、神田の清水の 8 つの清水を対象とする。空間整備は清水の物理的な形態を変化させ、清水の生活利用や維持管理に影響を与えられ、観光地化によって洗濯などが外部の目に触れることなどにより生活利用に影響を与えられ、これらの 8 清水は生地の清

水の中でも空間整備や観光地化の影響を特に大きく受けていると考えられ、清水と住民の関係の持続性を分析することに適していると考えられる。

2. 手法

(1) アンケート調査

対象となる 8 つの清水に対する地域住民の意識や利用の状況、およびその変化について把握するため、住民に対するアンケート調査をおこなった。調査時点で清水利用の実態と利用者の全数が把握できなかったため、配布は清水利用者であることが判明している住民と、生地自治振興会に依頼し、回収は生地自治振興会に依頼した。その結果 72 件のアンケートを回収した。

(2) ヒアリング調査

また、対象 8 清水について生活利用や維持管理の実態など地域住民と清水との関係や、空間の変化などを把握するためにヒアリング調査を実施した。その概要を表-1 に示す。

表-1 ヒアリング調査概要

対象者	属性	日付	内容	
1	A	黒部市商工観光課	2017/10/10	現在の行政施策
2	B	生地自治振興会会長	2017/11/15	自治振興会の活動
3	C	黒部市商工観光課 初代観光開発係長	2017/11/15	観光地化の経緯
	A	黒部市商工観光課		
4	D	黒部観光ガイド会長	2017/11/16	ガイドの活動
	E	黒部観光ガイド会員		
5	F	清水庵の清水利用者	2017/11/16	清水庵の清水について
	G	絹の清水利用者		
6	H	Gの職場同僚	2017/11/16	絹の清水について
	I	神明町の共同洗い場利用者		
7	I	神明町の共同洗い場利用者	2017/11/16	神明町の共同洗い場について
8	J	弘法の清水(神明町東)利用者	2017/11/16	弘法の清水(神明町東)について
9	K	神田の清水利用者	2017/11/17	神田の清水について
10	L	四十物昆布社長	2017/12/19	黒部の地下水
	M	黒部市議会議員		
11	N	黒部観光ボランティアの会初代会長	2017/12/19	生地の生活について
	M	黒部市議会議員		
12	M	黒部市議会議員	2017/12/19	清水の抱える課題
13	O	弘法の清水(神明町西)利用者	2017/12/20	弘法の清水(神明町西)について
	P	生地自治振興会 まちづくり推進員		
14	Q	殿様清水利用者	2017/12/20	殿様清水について
	R	殿様清水利用者		
	S	殿様清水利用者		
15	P	生地自治振興会 まちづくり推進員	2017/12/20	弘法の清水(四十物町)について
	T	弘法の清水(四十物町)利用者		
	U	弘法の清水(四十物町)利用者		
	P	生地自治振興会 まちづくり推進員		

3. 住民と清水との関係の現状と変化

アンケート調査の結果を元に、対象 8 清水における住民と清水の関係の現状と、これまでの変化について整理する。なお分析にあたっては、清水の維持管理をしている、またはかつてしていた住民と、過去から現在までしたことがない住民では、住民と清水の関係のあり方、認識の仕方に差が出ると考え、アンケート結果のうち、現在または過去に維持管理に参加していた 35 名の結果を使用して分析をおこなった。

(1) 清水の利用の変化

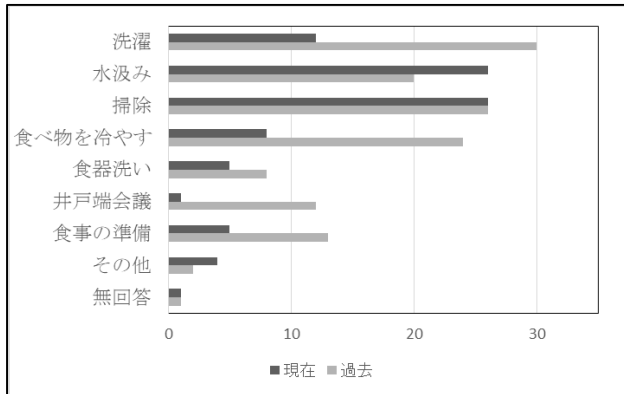


図-2 清水の利用のされ方

清水の利用について、「過去、清水が最も活発に利用されていたと考える時期(以下：過去)」と現在の使い方についてたずねた結果を図-2 に示す(いずれも複数回答可)。過去と現在の利用を比較すると、過去は、洗濯、掃除、食べ物を冷やすが多かったが、現在では洗濯、食べ物を冷やすの利用が減少し、水汲み、掃除の利用が多くを占めていることがわかる。食器洗い、食事の準備といった項目も減少するなど生活利用の減少が顕著であり、日常的な生活利用が減少していった様子が分かる。井戸端会議の減少もこれに連動したものと考えられる。

(2) 利用減少の要因

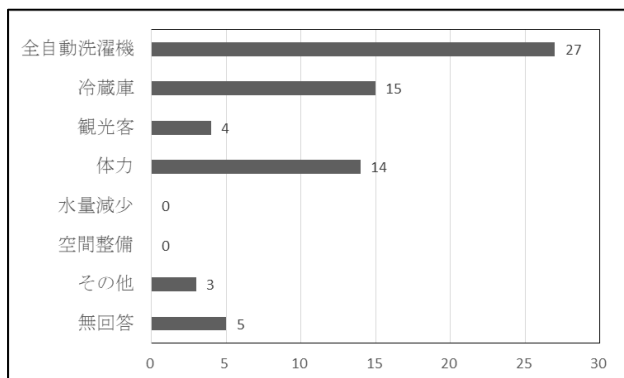


図-3 利用減少の要因

清水の利用減少の要因に関する結果(複数回答可)を図-

3 に示す。これより利用減少の要因として全自動洗濯機(27 人)や冷蔵庫(15 人)といった家電の普及、高齢化による体力の衰え(14 人)が比較的多く指摘されている。ヒアリングでも「みんな足がどうとか、亡くなりはったりしてだんだん減っていったんです。」(ヒアリング F)と述べられるなど、体力の減退による利用者の減少に加えて、もとの利用者が亡くなった後、利用に新規参入する人がおらず、利用者が減少していったことがわかった。

(3) 空間整備の影響

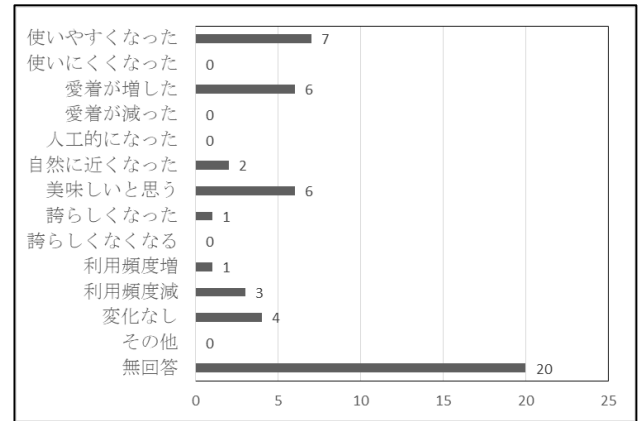


図-4 空間整備の影響

空間整備による影響に関するアンケート結果(複数回答可)を図-4 に示す。空間整備による影響として生活利用の利便性が向上していること、空間整備が利用頻度の増減に影響を与えているケースがあることがわかった。また、無回答が多くなっており、その理由として空間整備やそれによる変化に対する実感があまりないことが推察される。

(4) 観光客の影響

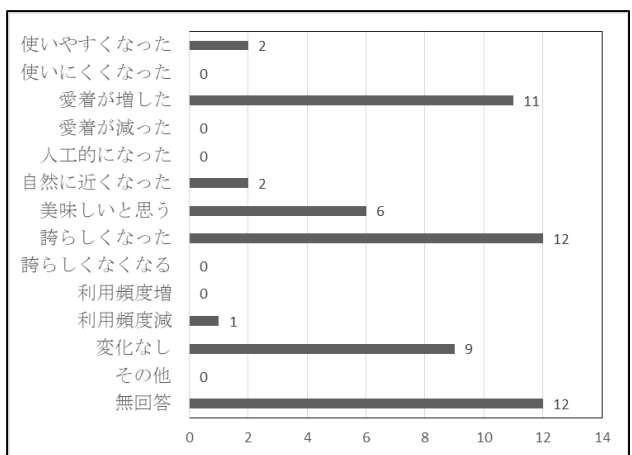


図-5 観光客の影響

観光客の影響に関するアンケート結果(複数回答可)を図-5 に示す。観光客による影響として愛着が増した(11

人), 清水が誇らしくなる(12人)などの地域住民の清水への意識の変化が比較的多く挙げられた一方で, 実際の使いやすさや利用頻度への影響に関する回答は少数であった。清水での活動が観光客という外部の目にさらされることによって清水の利用が減ることが予想されたが「利用頻度が減少した」との回答は1人にとどまった。

4. 各清水について

(1) 各清水の基本情報

清水利用者や行政関係者などに対するヒアリング調査および文献調査の結果を図-6, 7に示す。

図-6には名水百選選定などの国, 県, 市の事業とボランティアの会立ち上げなどの生地での出来事および各清水における維持管理形態と空間整備を年表にまとめ, 整理した。その結果, 現在すべての清水で維持管理活動が行われていること, 維持管理形態には違いがみられることが分かった。対象の8清水において, 維持管理の形態は5つに分類することができた(表-2 参照)。なお, 一部の清水では維持管理形態の変化がみられるが維持管理形態の変化の時期と空間整備や観光施策の時期が一致していないことが多いことが分かった。また, ポールやナンバープレートなどの設置および空間整備が名水百選選定を受けて行われたことが分かった。

表-2 維持管理形態の分類

当番型	当番制の清掃により利用者全体で維持管理を行う
個人型	一部の利用者が自主的に維持管理を行う
町内会型	町内一斉清掃の際に清水の清掃も行うなどにより町内会が維持管理を行う
個人+町内会型	個人型・町内会型の双方の維持管理が行われる
管理なし	管理する主体がいなくなり, 維持管理が行われない

図-7では対象の8清水について清水の位置や現在の維持管理参加者の居住地を地図上に表記し, 維持管理形態などの基本情報をまとめた。現在の維持管理参加者に着目すると当番型では14人から23人という比較的多くの住民が維持管理に参加している一方, 個人型では維持管理参加者が1人ないし2人になっており, 維持管理形態によって維持管理に参加する住民の数に大きな違いがみられることが分かった。

(2) 各清水における特徴的な事象, 活動について

特に特徴的な事象や活動のある清水について以下にその詳細を示す。

a) 1, 清水庵の清水

清水庵の清水は大町町内で唯一の清水であり, 他の清水利用者から「大町の清水っていうね。」(ヒアリング0)と言われるように「大町の(清水)」と呼ばれることも

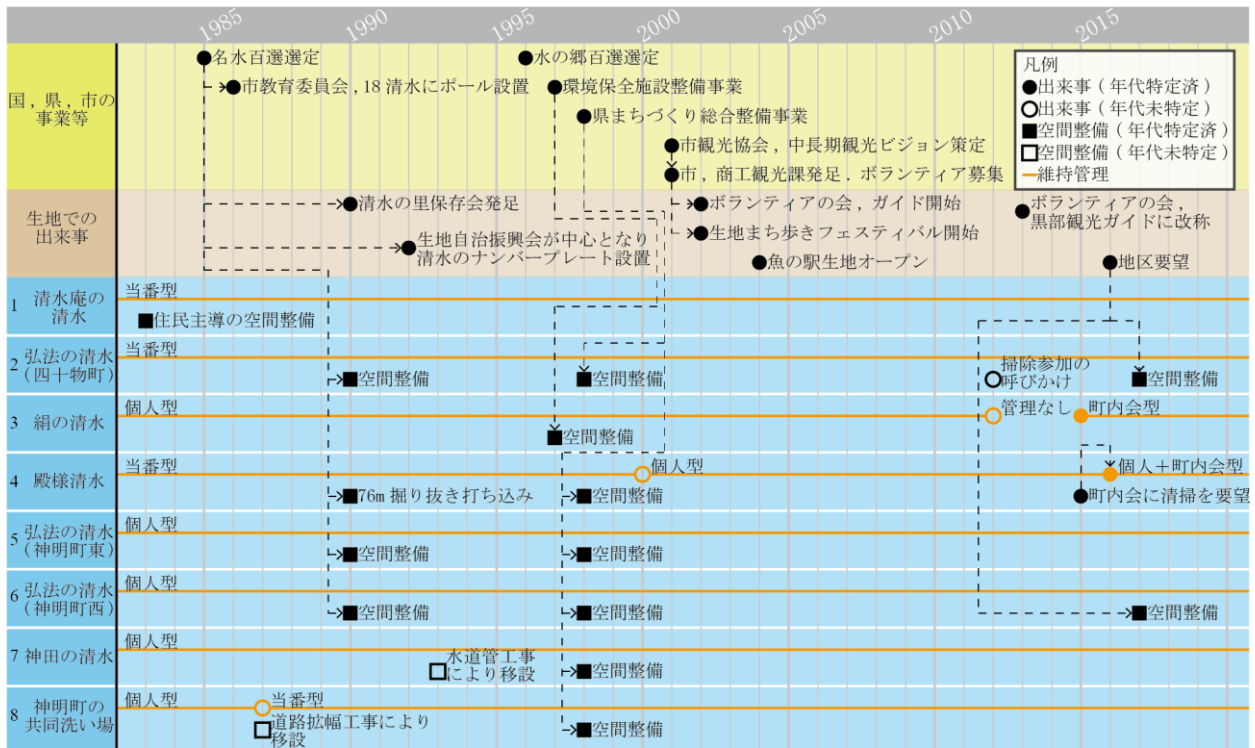


図-6 8清水についての年表



図-7 8 清水の概要

多い。また、行政による清水の空間整備以前に住民主体で空間整備が行われており、その際に 86 人の住民から協賛がされる(ヒアリング F)など、大町の住民からの愛着が大きいことが現在に至るまで当番型の維持管理が継続している要因の 1 つと考えられる。

b) 2. 弘法の清水(四十物町)

弘法の清水(四十物町)は、四十物町町内に唯一の清水である。当番型の維持管理が継続しているが、2012 年ごろに利用者の T が四十物町内の住民に声掛けをし、その結果 10 人程度だった維持管理参加者が現在は 23 人に増加した。新規の維持管理参加者について「入りたいですっていう人がいたら、入れて。たまに入れてっていう人いるよね。やっぱり近いから水でも汲みに来るから、入ってたほうが気楽なんでしょうね。入れてっていう人もいるよね。」「でもほとんど使っていない人だよ。」(ヒアリング T)とあるように、必ずしも清水を利用していない住民も参加している。町内会などで顔を合わせる機会も多いことが、維持管理参加者の増加に寄与した可能性がある。

個人の自由意思によって清掃が行われ、だれが清掃を行っているかが清水の利用者や付近の住民にしかかわからない個人型に対して、当番型の維持管理の場合は掃除当番に参加している住民とそうでない住民とははっきり区別され、維持管理を行う住民が可視化されるため、町内唯一の清水を対象とし、町内の住民がベースとする当番型の維持管理が、町内の活動の一環として行われるような状況になり、維持管理の持続性に寄与する可能性について指摘できる。

c) 4. 殿様清水

殿様清水では、現在神明町の共同洗い場と弘法の清水(神明町東)のみに残っている「追善供養」がかつて行われていたが、1998 年を最後に追善供養は行われなくなった。その理由として、住民は「老化。出れなくなってね。」(ヒアリング Q)と述べている。

その後 2000 年頃に当番型の清掃もおこなわれなくなり、生活利用した住民が、その都度で清掃する個人型の維持管理に移行していった。

d) 5. 弘法の清水(神明町東)

神明町東にある弘法の清水では、かつて利用していた住民の子供や周辺の利用者が「親光会」という会に属し、毎年 2 月の第三日曜日に追善供養を行っている。追善供養は前年に亡くなった親光会の会員や会員の先祖の供養を行い、その後お茶会を行う行事であり、現在は弘法の清水(神明町東)と神明町の共同洗い場の 2 つの清水のみで行われている。弘法の清水(神明町東)の追善供養は、かつて弘法の清水(神明町東)の周辺に居住していた K が毎年主催している。K は現在は転居し、神田の清水を利用している。現在は清水を利用していない住民も追善供

養には参加し、「みんなやめようなんて言わない。皆さん楽しみにして、年齢はバラバラですけど」(ヒアリング J)と大切にされている。一方で主催している K が追善の当番をやめた場合、追善供養が途切れる可能性があり、「いつそれ終わるかもわからないよ。来年終わるかも。」(ヒアリング J)とも言われている。

e) 8. 神明町の共同洗い場

神明町の共同洗い場では 1987 年頃に道路拡幅の際に現在の位置に移転した。それ以前の洗い場は現在のものより小さく、掃除の負担が小さかったが、現在の位置に移転する際洗い場が大きくなり、清掃の負担が増した。これを契機に共同洗い場を使用する住民が話し合い、維持管理形態を個人型から当番型に変更した。この変更は地域住民が自主的におこなったもので、空間整備を行った行政などと維持管理形態のあり方に関して相談はなかったという。その後、現在でも当番型の維持管理が続いているが、生活利用者、維持管理参加者ともに減少している。その理由として「亡くなって。あんまり若い人はこの辺に住んでなくて、亡くなってかれたらそれで消滅。」(ヒアリング I)と聞かれるなど、生活利用していた住民の減少後、新規の利用者がいないことが要因として挙げられた。

神明町の共同洗い場では、清水の清掃当番参加者による「清水の会」が存在するが、一部体力などの面から清掃に参加できなくなった住民も含まれている。清水の会は毎年 1 月 3 日に前名寺にて追善供養を行っている。追善供養は、清掃に参加しない住民も含め、年に一度清水の会の会員が一堂に会する機会であり参加者に大切にされている。「清水の会」の追善供養は、清水の会の住民の中から交代で選ばれる追善当番によって運営されており、追善の当番を 1 人が続けている弘法の清水(神明町東)に比べ、運営の負担が分散し、かつ多くの会員が中心的な役割を担うシステムになっているといえる。

神明町の共同洗い場では、追善供養の存在により清水の会の会員が集まる機会が定期的に設けられている。このことにより清掃当番の参加者は追善供養によって地域のコミュニティに属し、地域の住民と交流する機会を持つこととなり、このことが清水の会および当番型の維持管理の持続に寄与している可能性がある。

神明町の共同洗い場では、かつて水槽をステンレスにするか現在の石にするかで利用者で多数決をとった際に、情緒があるという意見が多く現在の水槽が採用された。しかし、「磨く磨くしてたら石がかけてくわけ。そしたら汚れが酷くなって、ひどくなって、だから掃除が大変なんだ。」(ヒアリング I)など掃除の負担に対する不満が出ている、生地自治振興会は平成 28 年度まで、少なくとも 8 年以上連続で水槽のステンレス化の予算要望を黒部市に提出している。

5. 分析・考察

(1) 清水と住民の関係

2 章では、アンケート調査より、洗濯・食べ物を冷やす・食器洗い・食事の準備といった清水の生活利用は減少していること、その理由として、全自動洗濯機、冷蔵庫といった家電の普及や高齢化に伴う体力の衰えが理由として挙げられることを明らかにし、ヒアリング調査より生活利用していた住民の減少後、新規の利用者がいないことを示した。

このように清水の生活利用は減少している一方で、本研究の対象である 8 清水全てで現在も何かしらの維持管理活動が行われていることがわかった。清水によって維持管理形態に違いがみられ、その維持管理形態は当番型、個人型、個人+町内会型、町内会型、管理なしの 5 つに分類できることを示した。中でも当番型は、他の維持管理形態に比べて、現在も定期的に清掃が行われ、清掃の頻度が高く、比較的多くの住民が維持管理に参加しており、清水と住民の関係の持続性が高いといえる。

(2) 清水と住民の関係への影響

空間整備や、観光施策など外部からの操作が、生活利用の減少、維持管理の持続に影響を与えた可能性について考察する。

a) 空間整備による影響

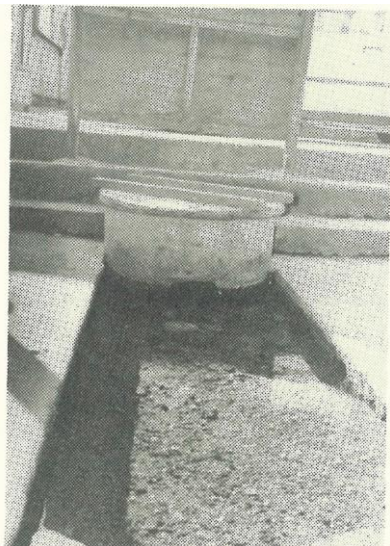


図-8 かつての殿様清水の様子
(年代不明、ふるさと生地の歴史点描より引用)

図-8にかつての殿様清水の様子を示す。殿様清水利用者が他の清水についても「そのまま流れとったけ。1本だけ流れとったね」(ヒアリング S)と語るなど古くは清水ははっきりと複数の段に分かれておらず、砂の上を水が流れている状態だった。他の清水の利用者も「今はき

れいになりすぎて、箱作ってって言うけれど、昔は砂地に流れてた。」(ヒアリング G)「こういうの(水槽)もなく、その昔はですよ。こういうのもなくて砂利だけだったんです。それで上の手で食べ物。あと下で洗濯。あとお茶碗」(ヒアリング O)と述べており多くの清水が図-8のような状態であったことを裏付けている。

黒部市の資料(「生地の清水」施設改修補助金)によると空間整備として洗い場内外装、床工事、床タイル張り、東屋新設、連絡道レンガ舗装、水槽人造石研ぎ出し、広場整備などが行われている。このような空間整備によって清水が使いやすくなったとアンケートでも 7 人が回答している。殿様清水では、かつては「ガチャガチャガチャ濁ってきたなくてももう使えない。」(ヒアリング Q)という状態から、水槽部分の成形により、洗濯の際に土砂が舞わなくなるなど、生活利用の利便性が向上したことが指摘された。一方、絹の清水では水槽ができたことで「洗濯したら藻がつくようになった。」(ヒアリング G)など、維持管理の負担が増加することが指摘された。また、「藻がたくさんつくのよ。それが 1 番つきづらいのは何かっていうとステンだった。」(ヒアリング N)と述べられるほど水槽のステンレス化によって藻が取れやすくなり掃除の負担が減少したことが言及されたほか、絹の清水において「距離も長いし、どこまでしていいかわからん。」(ヒアリング G)と述べられるなど開渠となっている水路によって排水をしている場合に清掃の範囲が広くなり、維持管理の負担が増加すること、殿様清水において「逆流する。風が吹いたりすると」と述べられるなど水路からの水の逆流や勾配が緩くなることによって水が流れにくくなることで生活利用の利便性が低下するなどの問題があることが言及された。このように行政の施策の中心である空間整備は生活利用の利便性や維持管理の負担に対して影響を及ぼすといえる。しかし、行政は空間整備の際に維持管理形態に対しては干渉せず、空間整備に際して維持管理形態が変化した場合の唯一の例である神明町の共同洗い場においても維持管理形態について行政からの言及はなく住民が自主的に話し合いの場を設けて維持管理形態を決定するなど、あくまで清水を利用する住民が自主的に維持管理形態を決定している。

以上より行政が行う空間整備は生活利用の利便性や維持管理の負担の大きさに影響を与えているが、維持管理形態は各清水を利用する住民が自主的に決定しており行政は介入していない。つまり行政は空間整備を行うものの、(1)で述べたように住民と清水の関係の持続に重要な役割を果たす維持管理形態に対しては作用を及ぼさない。結果として空間整備は清水と住民の関係の持続に大きく寄与していないと考えられ、形態的な整備のみでは住民と清水の関係の持続性は大きく変化しないことがわかる。このことは清水と住民の関係の持続性は維持管理

形態などの清水と住民の関係のあり方によって規定されるが、関係のあり方は外部主体による空間の形態的な操作には影響を受けないことを示唆している。

b) 観光客による影響

次に維持管理に対する観光客の影響について分析する。アンケート結果より、観光客による変化として「愛着が増した」(11人)「誇らしくなった」(12人)という回答が多く、住民の清水に対する意識は変化したといえるが、「使いやすくなった」(2人)「使いにくくなった」(0人)「利用頻度増」(1人)「利用頻度減」(0人)といった回答は少なく、生活利用に対する影響は小さかったことがわかる。また、ヒアリング調査においても維持管理や維持管理形態に対する観光客の影響については言及がなく、維持管理に対する影響も小さかったといえ、外部主体である観光客は住民と清水の関係の根幹をなす生活利用や維持管理には大きく影響しないことがわかる。理由として観光の始まった 2000 年代にはすでに生活利用が減少していたこと、観光客は水を飲むだけで維持管理の負担を増加させないことが挙げられる。

(3) 清水と住民の関係に対する地域社会の影響

ここまでの分析から、空間整備や観光客の維持管理形態に対する影響は小さいことが分かった。ここからは清水と住民の関係の持続性に対する地域のあり方や住民の活動の影響を分析する。

現在当番型の維持管理の行われている神明町の共同洗い場では清水の追善供養が現在も続いており、清水の会の会員が一堂に会する機会として大切にされていること、神明町の共同洗い場以外で当番型の維持管理が行われている清水庵の清水と弘法の清水(四十物町)はそれぞれ町内唯一の清水であることが維持管理の持続に寄与している可能性があることが 4 章よりわかった。このことから地域のあり方や住民の活動が清水と住民の関係の持続に影響を与えている可能性が示唆された。

(4) まとめ・今後の課題

本研究の成果は以下のとおり。

- ・ 清水と住民の関係についての分析から生活利用が減少しているものの維持管理による清水と住民の関係の持続がみられるケースがある。しかし維持管理の形態によって清水と住民の関係の持続性は異なる。
- ・ 維持管理の持続に対する空間整備や観光客の影響は比較的小さく、維持管理を実際に行う主体であり、維持管理形態の決定も行う住民がくらす地域社会のあり方や地域の活動による影響が比較的大きいことを示唆した。

今後、地域資源と住民の関係を活かしたまちづくりを計画する際には生活利用の利便性や維持管理のしやすさ

といった表面的な事象のみを考慮して空間的な整備を行うことにとどまらず、維持管理の形態や地域社会のあり方を調査・分析し、それらを考慮したうえで地域資源と住民の関係を地域に生きる住民の生活の中に組み込んでいけるような計画を策定することが重要であると考え。

謝辞：本論文を執筆するにあたり、黒部市生地地区の住民の皆様、コミュニティセンターの皆様をはじめ、多くの方にお世話になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 文部科学省. 地域資源の活用を通じたゆたかなくづくりについて. 最終閲覧日 2018 年 4 月 24 日 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu3/shiryo/_icsFiles/afiedfile/2011/03/28/1303081_11.pdf
- 2) 環境省. 「名水百選」について. 最終閲覧日 2018 年 4 月 24 日 <https://water-pub.env.go.jp/water-pub/mizu-site/meisui/info/kijyun.html>
- 3) 生地公民館. ふるさと生地の歴史点描. 1989 年発刊
- 4) 環境省. 黒部川扇状地湧水群(くろべがわせんじょうちゆうすいぐん). 最終閲覧日 2018 年 4 月 24 日 <https://water-pub.env.go.jp/water-pub/mizu-site/meisui/data/index.asp?info=29>
- 5) 国土交通省. 水の郷百選 富山県黒部市. 最終閲覧日 2018 年 4 月 24 日 <http://www.mlit.go.jp/tochimizushigen/mizsei/mizusato/shichoson/hokuriku/kurobe.htm>
- 6) 黒部市. 「生地の清水」施設改修補助金
- 7) 黒部観光ガイド作成資料
- 8) 黒部市. 黒部市の人口推移. 最終閲覧日 2018 年 4 月 24 日 <https://www.city.kurobe.toyama.jp/guide/svGuideDtl.asp?servno=345>
- 9) 吉住優子, 鈴木毅, 木多道宏, 舟橋國男, & 李斌. (2003). 洗い場の持続的共同利用の仕組みに関する研究: 長崎県島原市船津地区"浜ん川"を事例として. 日本建築学会計画系論文集, 68(564), 187-194.
- 10) 吉田晃子, & 畔柳昭雄. (2010). 伝統的水利施設 "マンボ" を介した人と水との係わりに関する調査研究. In 環境情報科学論文集 Vol. 24 (第 24 回環境研究発表会) (pp. 131-136). 一般社団法人環境情報科学センター.
- 11) INOMATA, S. 郡上八幡における水利用施設の保全に向けた空間整備のための一試論—管理し得る主体と空間の在り方に着目して—.
- 12) 助重, & 雄久. (2004). 富山県黒部市生地地区における湧水の利用--「清水めぐり」を中心としたまち

- 歩き観光とその課題. 富山国際大学地域学部紀要, 4, 81-93.
- 13) 川久保, 佐藤, & 國澤. (1999). 富山県黒部川扇状地における湧水利用—黒部市生地地区の共同洗い場を事例として—. 黒部川扇状地研究所紀要, 24, 37-47.
- 14) 黒部市. これまでの利用者数(推移)平成 28 年度版 (2018.4.27 受付)